

---

# 満天の星空の下で

三谷コウタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

満天の星空の下で

### 【Zコード】

Z45870

### 【作者名】

三谷コウタ

### 【あらすじ】

高校2年生の春谷旬太には朋美という好きな女の子がいた。彼女とは物心ついたときから仲良しで、いつも一緒にいた。しかし、彼女は私立の中学に行ってしまい、とうとう離ればなれに。そこで落ち込んでいる旬太を支えてくれたのは親友である平川康介だった。

そして、旬太たちが高校に進むと何とそこには朋美の姿が！　旬太は再びあえた事に喜ぶが、親友である康介まで朋美を好きになってしまった。親友である旬太と康介はの心は互いにもつれ合ってしまった。親友である旬太と康介はの心は互いにもつれ合つてしま

うが……

## 第1話 一星空一（前書き）

初めて小説に挑戦しました。つまらないと思いますが、それでも感想等頂けるとうれしいです。もし読んでいただけたなら、ぜひ感想をお聞かせください！ お願いします。

## 第1話 一星空

夜空に輝く星がとても奇麗だ。一つ一つの星は小さいが、小さな光を灯し合つて幻想的な世界を造りだしている。その中には青い星や、赤い星などもあり、それぞれが好きなように輝いていた。踊るよつに輝く星々は、集まっているものもあれば、ちりぢりな物もあつた。本当に自由。気の赴くままに、輝いているようだ。

でも、他の星まで光で飲み込んでしまうよつなことはしない。もう少し前は、太陽が出ていた。太陽は空の全てを照らし、小さな星なんて見えなくしてしまつ。

でも、今はもう太陽は出でていない。太陽は静かに沈んでくれた。

「奇麗だな……」

「うん……」

あいつと一人で、満点の星空を見上げる。

俺は、こいつと一人で居られるのがとても幸せだ。こんないいパートナー、一生かけて探してももう一度と見つけられないだろう。夜空の下で、俺は泣いてしまつた。

「なに……ないてんだよ……バカ……」

「だつて……」

いつまでも泣いていた。いろんな感情が混ざつて、うまく言葉にならない。

やつと終つたのだ。俺は、長年悩み続けた。悩んで、悩んで……ずっと落ち込んでる時期もあつた。くよくよし続けた時期もあつた。だが今は、こつしてここにで居られる。いまここで、こうして居られるのなら、こままで悩んできたことも、悪くはなかつたと思える。

俺たちは夜空を眺め続けた。本当に満点の夜空で、吸い込まれてしまいそうだった。

また、明日から退屈な日常が戻つてくる事など、頭の中にはかけ

らもなかつた。

この楽しい時間はいつまでも続く。そんな気がした。

この素晴らしい時間を抱きしめていたい。こんな奇麗な空の下で

……これからも……ずっと……

## 第1話 一星空一（後書き）

最後まで読んでいただき本当にありがとうございました。初めての作品だったので勝手がわからず、たじたじの作成でしたがなんとか書ききました。ご感想等いただけたら幸いです。ありがとうございました。

## 弟2話 一朋美一

右手で持つて いる ペンを クルリ と まわす。

「いいか？ この 場合、X 軸に ついて 線対称 と 言ひ 事は だな……」  
黒板の上に 掛け られ て いる 時計 が、 退屈な 時間を 一秒一秒、 丁寧  
に 刻んで いる。

数学教師である 小村 は、 関数の 問題に ついて 無駄に 詳しく 説明し  
て いた。 最近、 妙に 授業に 熱が 入つ て いる。 もうすぐ、 テスト が 近  
い の だ。 自分 が 担当する クラス に いい 点を 採ら せたい の だろ う。  
そん な、 下ら ない 教師 の 熱意 の せいで、 ただ で さえ 退屈な 時間 に、  
眠る 事 が でき ない と い う 何とも 不 愉快な 状況 に 陥つ て いた。 だ が、  
俺 は そん な こと で は め げ ない。 もはや、 鉛の ように 重くなつ た まぶ  
た を しつかり 見開き、 教科書と 向か い 合 う。 教科書 に 書いて ある 問  
題 に、 一 文字ずつ 田 を 通し、 右の グラフ を 見る！

そし て、 そ う！ X 軸 と Y 軸 が 作り出 す 一 次元 空間 の 中で、 数本  
の 線 が 直進 し たり…… リターン し て いる の を 見て いる と…… だんだ  
ん 視界 が 狹く なつ て き て……

「春 谷！ おい、 寝てる 場合 じや ない だろ！ 今は 授業 に ついて 来  
れ て も な、 油断 し て ると すぐ に 成績 は 落ちる ん だ から な！」

「あ、 は、 はい！ 大丈夫 です！ 大丈夫 です。」

また、 やつ て し まつた……

わかつ て も、 つい つい 寝 て し まう の だ……

「全く…… そ うやつ て 授業 中 寝て る ような 奴 が、 わから なくなつた  
から と 言つて、 塾 に 駆け込む ん だ？ ？」

もう 小村 に 憎まれ 口 を 叩か れる の は、 慣れ て いた。 小村 は まだ グ  
チグチ 言つ て いる が、 この 俺 を な める な。 人間 つて のは な、 環境 適  
応 能力 つてもん が ある ん だよ！ この 場合、 環境 適応 能力 と い う 言葉  
が 合つ て いる の か は わから ない が、 と に かく 俺 は 慣れ て いる の だ。  
じつ して、 いつも 通り 退屈な 時間 も 過ぎ て いく。

そして、もう一つ、いつも通り……いつも通り、教室内に特別なものがある。

「くすっ……」

俺が怒られた事に教室のみんなが笑っていたが、俺には一人しか見えていない。俺の席から、二席前にいる娘。

背中までのびる茶色がかつたふわふわでさらさらの髪。その一部を肩のあたりで束にしてリボンで結んでいる。見てるだけでいい香りがしてきそうだ。目は少しだけたれ目。どうんとしている。

西原朋美

それが、彼女の名前だ。

彼女とは別に、特別な関係にいる訳ではない。彼女にとつて俺は、ただの幼なじみだ。特別、意識してはいないだろ？  
だが俺は、違う。

俺にとつては、違う。

朋美は俺にとつては、この上なく特別なのだ。

朋美と出会ったのがいつだつたかは、覚えていない。

朋美の家は近所で、小さい頃はよく遊んだ。親同士の近所付き合いが合つたから、物心ついた時には俺は朋美の事は知つていたし、仲も良かつたのだ。

そして、俺も朋美も兄弟がいて、小学校低学年くらいまでは、俺の妹と朋美の弟と四人で遊んだりもした。小学校の裏にある竹林に入つて、忍者ごっこをしたり、鬼ごっこをしたり……

そういうしているうちに、俺たちは高学年にあがつていった。

5年生になつても俺たちは同じクラスだつたが、さすがに、高学年にもなると女の子と遊ぶのは気が引けたし、話す機会も減つていつた。

でも、俺はその時から朋美の事ばかり気になるようになっていた。授業中もちょっと集中力がきれると、彼女の方を見てしまった。休み時間でも近くで彼女が話していると、そちらに耳が傾いた。夜寝る時も、彼女の顔が浮かんで落ちついて眠れなかつた。

小学5年生の俺には、この気持ちが何なのかはよくわからなかつたけど、彼女がいるだけで、彼女に会えるだけで、学校が楽しかつた。そんな楽しい時間が終る事など考えもしなかつた。

楽しい！

明日も、朋美に会える！

それだけで、十分だ！

俺は、だんだん膨らむこの気持ちが、恋なんじゃないかと気づき始めていた。そうだ、きっと恋なんだ。

でもそれに気づいたのと同時に、恋は終わりを告げる。

朋美は、中学受験をするというのだ。

それを知ったのが小学6年生に上がつてすぐだ。

彼女が受ける学校はそれほど、偏差値の高い学校ではなかつたが、英語の教育が秀でており有名だつた。中学のうちから海外研修があるほどなんだそうだ。彼女は、将来、留学でもする気なんだろうか？ そんな事も考えた。

俺は、本気で悩んだ。俺だつて成績はいい方だ。いまから塾に入れば、その学校に入れるんじやないか？

しかし、無理だつた。親が許してくれなかつた。

「そんな学校、入つてどうするの？ 将来、海外で仕事したいの？」

母親に質問されたが答えられなかつた。「好きな子が行くから、俺も行く」なんて、とても言えない。適当に将来を語つてもよかつたが、親を騙してまで突き進む決心も、自信もなかつた。

結局俺は、朋美を諦めた。

所詮、俺の一方的な想いだ……そんな風に自分に言い訳をして、

告白もしなかつた。

中学も違うのに、うまくいくわけがない……そう勝手に決めつけ

て。

一月になり、朋美は中学の合格を決めた。そうして俺たちは、中学生になった。

そして、俺は中学に上がるとかなり後悔した。中学2年生にもなると、周りには違う学校のやつと付き合つ奴もいっぱいいた。

やっぱり、告白しとけば良かった…

後の祭りだつた。

ここ最近彼女と顔を合わせる事は無かつたし、小学校の頃は携帯なんてもつてなかつたので、メールアドレスも知らなかつた。

俺は、ずっと落ち込んでいた。いつまでも、いつまでも。中学2年生が終わつても、永遠と朋美を想い続けた。自分でも情けないと思つた。でも、想いを断ち切る事は、できなかつた。

中学3年生で一人の親友と出会わなければ、ずっとくよくしてただろう。そいつは俺を支えてくれた。

そいつは、偶然同じクラスになつた。すぐに、仲良くなつた、いろんな話をした。そいつは俺の話をちゃんと聞いてくれた。俺に好きな人がいる事。結局告白出来ずに、後悔している事。ずっと、想い続けている事。全部吐き出して、俺は少し、前を向けるようになつた。

そのまま、俺は、そいつと同じ高校に上がつた。それはべつに、そいつが、その高校にいくから俺も行く事にしたのではない。学力がだいたい同じだつたから、そのまま同じ道に進んだ。

そして。

俺は高校の入学式で、信じられない体験をする。

春休みの余韻が抜けきらないまま、それと同時に、高校への希望と不安を抱えて。集まつてくる集団。高校の教室が開くまで、新入生は全員、昇降口の前で待たされていた。

これから、新しい生活が始まる。そんなことを、思つていただろう。未練は合つたものの、だいぶ傷が癒えていた俺はその集団の中に、一人の女の子を発見する。

「朋美……」

思わず声に出してしまった。しかし、その声は人ごみにまぎれてしまつ。

おそれらく俺は、30秒ほど口をあけて、間抜けに立つていただろう。あまりの出来事に、状況がわからなかつた。

真っ白な頭を必死に整理していると俺は、無意識に朋美に駆け寄つていた。高鳴る気持ちを押さえて走り寄つた。また、あの楽しかつた頃の感覚がもどつてくる。

なんでここにいるんだ？ 留学はしなかつたのか？ 中高一貫校だつただろ？ 中学ではどんなだつたんだ？ 高校から学校変える事にしたのか？ いままでずっと……ずっと……俺は！

そんな疑問や想いが田まぐるしく頭の中をどび交つたが、なんとか押さえて彼女に歩み寄つた。

しかし、そんな時、集団は一気に動いた。俺を邪魔するよつまるで、押し寄せる波の様に。

昇降口が開いた。

朋美に追いつく事はもうできなかつた。

「朋美……」もう一度つぶやく。

追いつく事は出来なかつた。

でも、俺の心は喜びで破裂しそうだつた。いろいろな疑問はまだ頭の中に巡つている。しかし、そんな疑問なんどつても良かつた。また朋美といられる。朋美と同じ学校に通える。

俺の心は小学生の頃と同じだつた。

そうして、おれの高校生活は始まつた。

### 第3話 一帰り道一

キーン「ーンカーン「ーン」……  
授業の終わりを告げる幸せの鐘の音色が響く。

「えー。次の授業までに、72ページに書いてある事を予習していくこと。いいな！ じゃあ、委員

長。号令」

「キリーツ。キヨツケ。レー」

委員長が慣ついたように号令をかけ、小村が教室から出て行くと、クラスは一気に放課後モードに

なる。今日は六時間なので、このあと軽いホームルームがあつて、それで終わりだ。担任が教室に来るまでの間、クラスはにぎやかになる。

「部活かー……だりーなー」

「なに言つてんだよ。今週末、練習試合だぞ？ おまえ大丈夫かよ」

「ねーねー？ このあと、あの店寄らない？」

「いいね！ いこい！」

「これF組の田中に、渡しとけよ」

「了解。居なかつたら、机に置いとくだけで良いだろ？」

「そんな、放課後トークが聞こえてくる。朋美はどうと……」

「……いない……トイレでも行つてしまつたのだろうか？」

「……ちょっとションボリしていると、俺にも声がかかつた。

「旬太。<sup>しゅんた</sup>一緒に帰ろうぜ！」

声をかけてきたのは、平川康介。<sup>ひらかわこうすけ</sup>さつき言つた中学からの、俺の

唯一の親友だ。

「ホームルームまだだろ？ がよ。せつかちだな。今日、部活は？」

「休み。この土日、両方練習試合だったからさ。月曜は休み

「そつか。じゃあ、コンビニでも寄つてくれ？」

そこで教室の扉が開く。担任の豊崎先生が入ってきた。

「いいよ。じゃ、あとでな！」

康介は一見すると、スポーツをやつてこむよりは見えない。サッカー部に属しており、夏休み明けというのもあってかすっかり日焼けしているが、それでもスポーツマン特有の気合の入った感じとこゝものが皆無だ。サッカーはそこそこひまいらしげ、あいつを見ている感じだと、とりあえずやつていると言つた感じだ。容姿は決して悪くはない。しかし……バカだ……

豊崎先生は教卓について、明日の予定について説明しだした。特に変わったことはなく、いつも通りの火曜日課だそうだ。

「じゃあ、今日はコレで解散ね。委員長。号令かけてくれる？」「キリーツ。キヨツケ。サヨーナラー。」

お決まりの号令に合わせてみんな「サヨーナラー」と復唱する。そして、豊崎先生は教室をさっさと出て行く。その様子を、何人かの男子は田で追つて、「やっぱ、豊崎先生って美人だよなあ。スラッシュした体に、スーツ、そして眼鏡！ 最強コンボだよなあ」

「ああ、そうだよなあ……憧れるわあ」

豊崎先生を見て鼻の下をのばしてゐる男子を、汚らわしそうに女子達が見ている。

恒例の動作が一通り済むと、後はみんなバラバラだ。部活に行くもの。掃除をするもの。帰るもの。

俺は無意識に朋美を見る。なにやらとなりの女子と相談している。しばらく話した後、そのまま教室を出でてしまった。今日は部活なんだろ？

朋美は、読書部とやらに所属している。なんだか珍しい部活だが、

活動は読んで面白かった本を他の部員に紹介して、一人一人紹介したら、後は本を読んだり、お菓子を食べたりとかなり自由な部活

だそうだ。その気楽さが人気なのか部員は、なかなか多い。全学年

合わせて20人くらい居る。文化

系の部活にしては、多いだろう。活動も週一回、月曜のみなので、とりあえずなにかの部活に入りた

い奴にも、手頃なんじゃないだろうか。

それはそうと、帰る約束があるので康介を探してみる。あいつも教室の入り口あたりで数人の男子

と話している。サッカー部の奴らだろうか。

「あいつらも相談か……」

俺は部活には入つてないので、放課後にだれかに会つて相談なり打ち合わせなりというものが全くない。

あいつらは忙しいね……

何となく窓際に寄りかかって空を見た。奇麗な秋空だ。薄い雲が帯みたに手前から地平線に向かつてのびている。

ふつ、と空しくなる。

「俺……小学校から変わつてないじゃん……」

俺は高校に朋美と共にいる事となつたが、中学のブランクが合つてか、未だにコミュニケーション

がとれない。1年のときは朋美と違うクラスだった。運命もそこまでお人好しではないのだろう。そんな風に黄昏れていたが、2年になつてあつさり朋美と同じクラスになつた。そのときは、入学式の時以上に狂氣した。これで、また、楽しい時間が過ごせるー。そう思つた。

でも、現実はやっぱりそうじやない。

俺は小学校の頃から変わつてなくても、朋美は変わつていた。

小学校の頃にはなかつた魅力をたくさん持つていた。

もちろん俺は、今まで以上に朋美に惹かれた。でも、俺は魅力があるから惹かれているのだ。そ

の魅力を感じるのはもちろん俺だけじゃない。

簡単に言つてしまえば、朋美はモテるのだ。

実際このクラスの何割かの男子は、朋美を好きでいるだろう。ますます、小学校の時に告白するんだつたと後悔する。せつかく、同じ高校に入れたのに……皮肉

にも、同じ高校に入ったから、もつと後悔する。

そのとき、ツンツンと肩を軽く突かれる。ハツとして振り返ると、

「よつ！ お待たせ」

「ああ、康介か……」

「康介が、つて何だよ？ もつと他の人に話しかけてほしかつたか

？」

「うう……ちょっとでも期待した俺が馬鹿でした」

「馬鹿で結構、結構！ 期待するのは大事な事だぜ？」

「何、格好つけてんだよ……早く行こうぜ」

康介がそんな馬鹿な台詞を言いながら馬鹿丸出しのポーズをとつたので、話を続ける気にならなかつた。

そのまま、さつさと昇降口に向かつ。

俺と康介は本物の親友だ。康介に会えた事は本当に感謝する。相談は何でも出来るし、康介も俺を頼つてくれる。普段は爽やかに見える康介も、俺の前では全然そんな感じはない。素で接してくれているのだろう。という事は、こいつの爽やかは作られてるつてことになるが……

だが、そんな康介にも打ち明けてない事がある。  
実は朋美のことだ。

確かに朋美のことは相談した。康介は相談に乗ってくれた。だから、俺は康介と親友になれた。

しかし、康介はまだ知らないのだ。なぜ自分が高校に入つてから、康介に打ち明けなかつたのかと聞かれると、はつきりとは分からない。

でも、俺は朋美のことは自分で決着をつけたいと持つてた。だから、まだ康介には打ち明けてなかつた。

俺が、小学校の頃から想い続けているのは、西原朋美だということを。

今、俺たちのクラスに居る、朋美なのだということを。  
中学で康介に相談した時、俺は朋美の名前は出さなかつた。伏せていた。名前までべらべらしゃべつてしまつと、なんだかもう過去のことみたいになつちゃう気がしたから。もちろん、康介も名前を知りたがつた。でも拒否した。そして、そのままここまで来てしまつたのだ……

学校からコンビニへ向かう途中、康介とたわいのない話をした。この前のサッカーの練習試合の時の事や、クラスの友達の事や、豊崎先生の事や……

同じクラスの男子のことを話題にして、大爆笑したり。もうすぐ発売になるゲームの予約はしたかどうかとか。あの漫画、まだ最新刊が出ないとか。そんなことを話してた。

そういう話してゐうちに、だんだん恋の話になつていつた。まあ、いつもの流れだろ。

俺が茶化して、あいつだろ？あいつだろ？って、康介を問いつめていつた。

だが、今日の康介は俺のおふざけに対するのりが悪い。本当に些

細で、周囲から見ればいつも通り

かもしだれない。でも、微妙に硬かつた。冷たかつた。

「なあ、旬太」

「な、なんだよ……」

康介が突然、真面目な声で呼びかけてきたので、少し驚いた。

「相談してもいいか?」

「うん……別にいいけど」

本格的に真面目モードだ。目が怖い。

俺が、OKサインを出しても康介は何も言つてこない。かなり間があった。

そんなに、深刻なそุดなんのだろうか。

そして、二人の間に、程よく沈黙が浸透した頃、

「……俺、好きな人がいるんだ！」

「へ……？」

あまりに唐突だったので、間抜けな声しか出なかつた。

好きな人が居る？ そつなのか。へ。

「つて！ マジかよつ！」

結構驚きだつた。康介は、普段から飄々としており、恋愛には興味がないと思つていた。

康介は珍しく恥ずかしそうにしている。意外と恋愛には弱いのかな、康介は。こんな康介を見るのは新鮮で意外と面白いことではあつた。つい馬鹿にしたくなるが康介は至つて真面目なのでやめておいた。こつちもちょっと真面目に話してみよつ。

「じゃあさ、告つて見れば？」

康介は、きょとんとしている。

「ちよつといきなり過ぎたか。

「えつ！？ 告るつたつて……てか、おまえ俺が誰のこと好きなの知つてんのか！？」

「そういうえば、知らなかつたな。だれなんだ？」

「いや……でもちょっと自信ないし……あの娘のこと好きな奴、結構いるみたいだし……」

「そりなのか？ お前も意外と、アイドル性高い奴とか好きななんだ？」

「そういうわけじゃないけど……」

「このとき、俺は他人ごとみたいに考えてた。こいつのことだから、きっと告白してうまく行かなくても、すぐケロツと忘れて……」

最初からうまく行かないと決めつけるのは可哀想だな。

でも、そんな風になるんだろうと思つてた。

康介が次の一言を放つまでは……

「俺が好きなの……西原なんだ……」

「えつ……？」

俺は焦つた。朋美のことを好きな奴が新たに発覚したから……もちろんそんな理由ではない！

康介が。俺の親友が。俺と同じ人を好きになつていた。

俺はしばらく黙つてしまつた。何も言えなかつた。

康介も同じ様に黙つてしまつた。俺の考えることがばれたのだろうか。康介はじつと俺の顔を見

ているが、俺は康介の顔を見れない。

「ああ……いや……いいんだぜ！ 何もしてくれなくて！ 俺もただお前には知つといてほしかつただけだからさ！」

康介が取り繕う様に言つたが、康介はきっと俺の頭の中を正しく理解出来ていなかつた。いや、出来る方がおかしい。

俺は康介に、俺が好きな幼なじみの名前を教えていない。康介は俺が好きな幼なじみは、中高一貫

校に通つていると思つているだろう。その幼なじみが同じ高校に通

う西原朋美だなんて、誰が想像で  
きるんだ！

「旬太……悪かったよ……お前、せっかくあの幼なじみから立ち直  
れてたのに……俺、知らなくて……」

「そんなんじやない……そんなんじやない！」

俺が好きなのは、ずっと朋美だけだ！

最後の言葉は口から出せなかつた。

康介は俺が新たに恋愛対象を見つけて、それを支えに完全に立ち  
直つたと思ったのだろう。

康介は俺の様子が明らかにおかしいので、困惑しきつている。

「悪い……今日は一人で帰る……」

そう言い残して俺は駅に向かつて走り出した。なんでこんな風にな  
つた。そんなの決まつてる。俺が

康介に、朋美のことをしつかり話しておけば良かつたんだ。中学の  
ときと言えなかつたのなら、高校になつてからでも言えれば良かつた。そうすれば、康介が朋美を譲つて  
くれるとかそういう考えでは決して  
ないけど、もつと他にいい道があつたはずだ。そうすれば、少なく  
とも今みたいに俺が取り乱して、康  
介を困らせることはなかつたはずだ。

すっかり夏も終わり、涼しくなつた風が全身に感じられる。普段  
は気持ちいいはずのそんな風も、今は空しいだけだった。

また一つ授業が終る。今のが四時間だから、もう昼休みだ。

「キリーツ。キヨツケー。レー」

どつと賑やかになる。弁当を食べるために隣の席に移動したり、机を動かしたりする奴も居る。俺もいつもは康介と食べるため席を移動するのだが、あの日以来気まずくて康介とあまりしゃべっていない。もう4日目くらいだろうか。

あの日は翌日、康介が話しかけてくれたが、俺は素つ氣ない態度を取ってしまった。康介は俺のことをそつとしておこうと思つてくれたらしい。今の俺にとって、その判断は助かつた。俺のせいでき

くしゃくしてゐるにまた康介に氣を使わせてしまつていて。本格敵にややこしくなつてしまつた。

相変わらず朋美とはしゃべれないし、康介にも氣を使わせてしまふ。

本当に俺つて情けない。今、教室の中には朋美も康介もいない。別にいてもどうにか出来る自信はないが。

昼休みは全部で45分ある。今は弁当を食べる氣にはなれなかつたので、校舎の中を適当に散歩してみることにする。

一年のときはよくこうやって昼休みに散歩した。中学の頃から俺はひとりを好むタイプなの、康介以外とは弁当を食べたりしなかつたからだ。友達がいないわけではなかつたが、一緒にいる価値があると思える奴がいなかつた。だから、康介が部活の集まりとかでいない時は一人でぶらぶらやつてた

のだ。

まず教室を出て左に行くと国語科の職員室があつて、その奥には何かの倉庫があるだけで何も面白くない。だからとりあえず右に曲がる、右にはD組とE組の教室があつて、その向こうに渡り廊下と階段がある。階段を下りてまつすぐいくと昇降口に続く廊下で、そこに売店が出ているので、そこに行つてみるのも良い。

階段を下りずに渡り廊下の方に行くという選択肢もあつた。渡り廊下は一本あつて、そのうちの一  
本が俺のお気に入りだった。その渡り廊下は、旧校舎と新校舎を結ぶ渡り廊下だが、旧校舎は耐震強度が足りないために近年しようできない。なのでその渡り廊下に人が来ることはほとんどなく、しかも途中で直角に曲がっているので、奥に行けば一人になれる良い場所だった。

「久々に行つてみようか……」

なんだかあの場所を思い出すと、突然一人になりたくなつた。  
2年になつてからはあまりいかなくなつていたから久しぶりだ。  
行つて特に何かをするわけではないが、あそこに行けば落ち着けるような気がした。行き先を決定し、すでにボーッとし始めた頭で考えてみる。  
何で俺、朋美のことこんなに好きでいられるんだろう……小学校5年生くらいから高校2年生までずつと片思いだ……

自分で言つても馬鹿らしいと思つてしまつ。  
そんなことを考えていると渡り廊下の奥はもうすぐそこだつた。

「久々に一人になりますか……」  
しかし、渡り廊下は俺を一人にはしてくれなかつた。  
そこには、康介がいた。

「しゅ、旬太！」

とびつきり驚いた顔をしている。

それもそのはずだ。

「旬ちゃん……」

俺の事を『旬ちゃん』なんて呼ぶのは一人しかいない。  
他でもない。朋美がいたのだ。

朋美が少し焦ったように、そして何か言いたそうに、口をモゴモゴしているが声は出でこない。

康介が焦つてフォローに入つてくる。

「旬太！ これは、違うんだ！ お前が思つてゐるような事では絶対  
ない！」

俺はもうそんな事はどうでも良かつた。

どうでも良くなつた。

俺は何も言わなかつた。

黙つて、その場から走り去る。

後ろから康介の呼び声がするが、その声を振り払つように走り続  
けた。

あの日から。渡り廊下ではちあわせたあの日から。

俺は康介を無視した。そんなのは理不<sup>ふ</sup>るだつて事くらい分かつて  
た。康介だつて好きな人はできる

し、告白だつてする。

そんなことは分かつてゐるに。べつに康介が許せないとかそういうのじやないのに。なぜか俺は康  
介を無視してしまつた。

「なんで俺はこんなに馬鹿なんだ…… もう何にもわかんねえよ……」

俺のせいだ。全部俺がややこしくしてゐる。

俺は一人で登校しながらそんな事をつぶやいた。

「今日もまた、退屈な一日が始まります……」

最近は退屈を通り越して憂鬱だつた。

もう学校に行つても康介とはつるめない。康介と関われない学校生活は本当に面白くないものだつた。改めて康介が俺にとつて大切な人間だと認識する。でも、前みたいに接する事が出来ない。

なんでこんな風になつてしまつたんだ。俺が考えるのはそんな事ばかりだつた。

そして学校に到着する。

教室に入るとすぐ朋美が目に入った。渡り廊下であつた日から毎朝、朋美は何か言いたそうに俺の

方を見てきたが、お互い声をかける事はしなかつた。

そして、康介はといふと毎朝遅刻ぎりぎりに来た。前からそつたが。

朝のチャイムが鳴ると、豊崎先生が教室に入つてきて、ホームルームを始める。またいつも繰り返しだ。

「じちやじちや考えてると、時間といつものはあつといつ間に過ぎていいく。

今日もまた一日が終る。

そのまま、何日か過ぎていつた。

康介とも誰ともしゃべらず。

そして、ある日の放課後。

康介に突然呼ばれた。

「おまえ、ちょっとついて来い

かなりの剣幕だつた。

しびれを切らしたらしい。俺はとくに何も考える事もなく、ついて行つた。

行き先は、あの日の渡り廊下だつた。

「おまえ、いい加減にしろよ」

康介の第一声はそれだった。俺はもつ何とでもなれといつ様な感じで受け答えした。

「何をだよ？ 俺がお前を避けてる事か？」

それを言つた瞬間、康介の表情がさらに厳しくなつた……様に見えたが、はつきりとは見えなかつた。

康介に殴られたのだ。左頬を。思い切り。

「ツツ……！」

俺はその場に倒れ込んだ。

「いつまでそりやつて逃げてんだって言つてんだよー。」

「何の事だ！？ おまえ、意味わからんねえよー。」

「朋美ちゃんの事だよー。朋美ちゃんのこと、いろいろ聴いたんだよー。」

「なんだ？ 朋美が好きで、朋美を嗅ぎ回つてたつてか？ 馬鹿か！」

「朋美ちゃんとおまえの関係だよー。」

「……！」

朋美と俺の関係……

幼なじみつてこと知つたのか？

なんで？ 本人から聞いたのか？

「おまえと朋美ちゃん、幼なじみだそりじゃんか」

「なんでそのこと……」

「朋美ちゃんと同じ小学校出身の奴にきいたんだよー。俺だつておまえの様子が明らかに変だつて気づいたよ。だから……もしかしてと思つて……まさか本当にやつだとは夢にも思つてなかつたけど

よ。もしおまえがあそこまで変になつちまう理由があるとしたら、朋美ちゃんがおまえの片思いの相手かもつて思つたんだよ。それで、聞いて回つたんだよ。」

「なんでそこまで……なんでそこまでわかつたんだよ？ なんでそ

んな、そんな途方もない推測たつたんだよ！？」

「おまえの変わり方が異常だつたからだよー。」

「……」

「おまえ……こんなこといつの気持ち悪いけどよ……俺の事、心から友達だと思つてくれてただろ？」

周りの奴らみたいな中途半端な友達関係じゃなつかつただろ？だから……そんな俺にさえあんな態度とるようになつちまうつてことは……俺よりもっと大事な物がどうにかなつちまうつうだつたつてことだろ？」

「……」

なにも言えなかつた。

「こいつは……康介は……」

「おまえにとつて、一番大事なもん。そこまで考え至つたら後は簡単だつたよ。最初は信じられなかつたけど。確かめてはつきりした。」

「康介……俺……」

「別に俺に黙つてた事どういひ言おうつてんじやない！　俺が……おまえに……朋美ちゃんが好きだつて言つたとき……なんで黙つてたんだよ？　俺に打ち明けてくれなかつたんだよ？」

「だつて……そんな」と言つたら……」

「フュアじやないからつてか？　打ち明けたら俺が朋美ちゃんのことを遠慮すると思つたからか？　そりやあそうだろ。友達が小学校の頃から恋してる相手と、その友達を差し置いて恋人になろううんて気が引けるよ。」

「じゃあ……じゃあ、どうしろつてんだよ！？」

「なんも気にしないで、打ち明けてほしかつた。」

親友つてそんなもんだろ？ 康介はそれだけきつぱり言つて、急に表情が柔らかくなつた。

「康介……」

康介の方が、完全に俺の上を行つていた。俺はどうしたらいいかわからなくなつて、途方にくれて

ることを、こいつはわかつてくれていた。

「やっぱ俺……康介がいないとダメだわ……」

そういうつた俺をみて、康介はふふんっと鼻で笑つた。

「俺だつて、旬太がいないとダメだよ」

「へへつ……気持ちわりつ……ホモかよ……」

不覚にも、泣いてしまつた。康介は……こいつは……

「さあて、これで仲直りだな！ 旬太よ！」

「……？」

「告りに行くぞつ！」

「はつ？」

俺は状況がつかめなくなつた。康介といつして仲直り出来て、正直嬉しかつた。しかしぬ次の瞬間に

は……

「はあああああああ！？」

俺は床に倒れた状態のまま、康介に両腕をつかまれ引きずられて

いつた。

今は正直に嬉しい。康介がやっぱり本物の親友だつて確認んでき

た。

しかし……このあと……どうなんだろう……？

## 第5話 一告白一

「ちょっと待てよ！ 待てって！」

俺をつかむ康介の右腕を無理矢理振りほどく。

「いきなり告白するとか、無理に決まつてんじやんか！」「

「何をいまさら！ 今まで散々思い悩んできたではないか！ 今

こそ、ケジメをつける時だ！」

康介はまた腕を引っ張つていぐ。強制的過ぎだ……

「なんで今なんだよ？ 別に今じゃなくたつて……」

突然、康介が振り向いたのでしゃべるのをやめてしまつた。

「な、なんだよ……」

「おまえ、今じゃなくて良いくて言つたな」「

「あ、ああ」

「じゃあ、いつやるんだよ？」

「え……？」

「じゃあ、いつ告白するんだって聞いてんの！」

康介の口調は強かつた。ちょっとと言い返せない……

「わからないんだろ？ いつ告ればいいか。なら今だよ！ 今……」

完全に反抗できなくなつた。

告白しなければならない……

今から……

頭の中が真っ白になつた。

「な、な、なんて、い、言えば、いいか、なあ？」

「そんなんの自分で考えろ！」

言いながらも康介はぐいぐい俺を引っ張つていぐ。

俺はもう何の抵抗もできず、素直に従うしかなかつた。

「着いたぞ」

到着にそう時間はかからなかつた。

行き先は教室だった。

「なんで教室なんかに？」

「中に朋美ちゃん待たせてる。早く行つて来い！」

康介が無造作におれの背中を叩いた。何度も何度も。

康介は表情を見られまいと下を向いているが、俺はその表情を見てしまった。

泣きそうな顔だった……

「康介……おまえ……」

「ほら！ 早く行けよ！ 一発かまして来い！」

康介は、取りはからつてくれたのだ。俺に告白させるために、この状況を造つてくれたのだ。

康介も朋美が好きなのに……その想いを飲み込んで……

俺は申し訳なくなつた。でも、ここまでしてくれた康介に申し訳なさそうな態度を取る事は、もつと申し訳ない。

康介……おまえは……

「康介、おまえが俺の親友で本当に良かつた

「……くつ。早く行けよ……」

康介本当にありがとう。

俺は教室の前に立つ。

これから、朋美に告白するのだ。

だが、俺は緊張していなかつた。逆に晴れやかな気分だつた。

これで、今までの想いを伝える事が出来る。六年間溜め込んできた想いを、伝える事が出来る。

教室の扉を開ける。

「匂ちゃん……」

朋美は俺の席のそばに立っていた。

今日ものびた長い髪を、両肩のあたりで一つの束にしていた。いつも同じ格好なのに、いつもより奇麗に見えた。

「朋美……」

俺は朋美に歩み寄る。

朋美が俺の顔を見上げてくる。とろんとした、瞳を覗き込むと吸い込まれてしまいそうだった。

そんな朋美の目を見ていると、朋美への想いがあふれてくる。ずっと、好きだった。

ほんの幼い頃から一緒にいた。小学校に入つても一緒に遊んだ。高学年に上がつても朋美が気になつて仕方なかつた。中学で別れてしまつ事を知り、本当に悲しかつた。中学に入つても朋美を想い続けた。

そして、高校で再会して本当に嬉しかつた。

俺の中には朋美しかいない。ずっと前から。

そう……ずっと……ずっと……俺は、

「ずっと俺は、朋美の事が好きだった」

はつきり言えた。もじもじしないで、自分の中に溢れる想いを素直に表現出来た。

朋美にはちゃんと伝わつただろう。

俺はこの短い使い古されたフレーズに、俺の全てをのせたのだ。

朋美は未だに何も言わない。黙つて下を向いている。

俺はその表情を伺う事は出来ない。

教室の窓からはちょうど夕日が見えた。夏が終わり、日が短くなり始めたこの時期の太陽は、ちょい地平線に差し掛かっている。

その夕日が、朋美の瞳から落ちた雲を、宝石のように輝かせた……

俺が朋美と付き合つ事になつた日から数日後、康介が面白い計画を提案してきた。

『LTUS計画』

いかにも中2臭いネーミングだが、内容は面白い物だった。

『星空の下で語り合おう』

それだけがテーマだ。

Let's Talk Under the Stars 計画  
ということだ。

康介らしいネーミングだが、内容はなかなか粹だ。

俺たちの地元の駅から電車で30分くらいの駅のそばに海がある。そここの砂浜で星を見ようと言つわ  
けだ。なんだか発案者が明らかに邪魔なシユチユエーシヨンだが……  
しかし、三人とも賛成だったのですぐに準備が始められ、発案から一週間で実行された。

9月下旬の海はつきり言つて寒かつたが、俺たちは気にせず遊び回つた。

到着したのが夕方だったので既に日は沈み始め、あたりは暗くなつてきた。

「あつ！ 星出てきたよ！」

「本當だ！」

「うお～！ 本格的に計画実行だ！」

そんな些細なことで盛り上がる程、俺たちのテンションは最高潮  
だつた。

そして、刻一刻と時間は過ぎた。

気がついたら辺り一面、星の海だつた。

「すごいね……奇麗……」

「ここで流れ星でも流れたら百点なのにな

「そんな都合良く行くかよ」

康介がもつとロマンチックな状況を求めているのは、ちょっと笑了。

俺たちは康介が持つてきたブルーシートの上に寝転がってかなり長い時間しゃべっていた。お互いを馬鹿にしたり。康介の恥ずかしい話をして朋美が笑い転げたり。本当に楽しい時間だった。

星空はあまりに奇麗だった。黒いカーテンに宝石を散りばめたような空を見ていた。

「朋美ちゃん寝ちゃったね……」

「さつきからはしゃいでたからな」

そこからは俺と康介でしゃべった。

「康介。今回のこととは本当ありがとな」

「何言つてんだよ、改まって。こんな計画何回でもたててやるよ」

「いや、計画じゃなくて……ほら……」

「告白の事か？ いいんだよ別に」

「だつておまえも朋美の事……」

「俺が決めた事だ。おまえは気にする事ない。おまえに朋美ちゃんは似合わないと思ったら、俺が全力アップ

ローチしてたぜ」

「でもおまえ、あの時泣いてたよな？」

「う、うるせえなあ！ ちょっとばかし朋美ちゃんから暴露されたんだよ……」

「じゃあ、やっぱ朋美も俺の事……」

「小4の時からだつてよ。おまえより長い」

「そうかあ。それは考えなかつた……」

そのとき俺はなんど康介に礼を言つたか覚えていない。

それでも俺の感謝の気持ちは伝えきれなかつたかもしれない。

「康介」

「ん？」

「やっぱおまえは、俺の親友だ。ずっと一緒にいよう

「人にキューピットやらせといて、それで×かよ。まつたく……当たり前だろ？ ずっと一緒にだ」

そのあと台詞が木モ臭いとふたりでグラグラ笑った。

ずっと長い事笑つて疲れてしまった。そして横になる。いろんな色の星々が輝いていて本当に美しい星空だった。またこんな風に見れたらな……

俺は心からそう思った。

## 第5話 一昨日（後書き）

最後までよんでもらいたい、ありがとうございました。  
初めて書いた小説なので自信がありません。  
アドバイスなど頂けると、とても嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4587o/>

---

満天の星空の下で

2010年10月23日00時26分発行